



TITLE:

張居正の土地丈量 (上) : 全體像と歴史的意義把握のために

AUTHOR(S):

西村, 元照

CITATION:

西村, 元照. 張居正の土地丈量 (上) : 全體像と歴史的意義把握のために. 東洋史研究 1971, 30(1): 33-61

ISSUE DATE:

1971-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/152834>

RIGHT:

張居正の土地丈量(上)

——全體像と歴史的意義把握のために——

西村元照

はじめに

一 丈量の前提

二 萬曆九年の土地丈量

(一) 當爲の丈量像

(二) 丈量の實態——その一——

(三) 丈量の實態——その二——(以下次號)

(四) 丈量の成果

三 ポスト張居正

小 結

はじめに

33 十六世紀の後半(一五八一年)明王朝の後期に、首席内閣大學士張居正によって行われた全國的土地丈量策は、中國史上空前の一大壯舉と一般に評價される。

ところでこの時期の中國社會には大きな歴史的變遷が見受けられる。まず一見資本主義の萌芽をも彷彿させる商品生産の發展や地主層による大土地所有の進展と地主經營が展開された⁽¹⁾。そしてこれらの社會的變化に應ずべき國家側の對應策として、一條鞭法から地丁銀に到る一連の徭役制度・徵稅制度の改革が行われた⁽²⁾。しかしこれらの改革を促したより大きな歴史的ファクターとして絶えざる鬭争の結果勝ち取られた、徐々にではあるがしかし確實な佃戸の地位上昇があったことを認めねばならない⁽³⁾。

ここに扱う張居正の土地丈量策もそれが基本的には、地主層の大土地所有の進展に伴う稅役負擔の極端な不均等と、更に恒常的な國家の徵稅不振を打開すべき抜本的解決策として現われ、更に丈量後には一條鞭法の全國的普及をも可能にするという點から、當該歴史段階に於ける極めて歴史的な一劃期を作り出す事件であつたとせねばならない。

この事件に關する研究史をたどれば、清水泰次氏が丈量實施時期と全國田土面積との二點から事件のアウトラインを設定したのに對し、藤井宏氏が反論し、その後個々の論點から朱東潤・陳恆力・韋慶遠等の各氏がこの問題に論及した。そして一九六〇年段階で通説化した諸點をもっとも簡明にまとめたのが山根幸夫氏であり、これらの點に數々の反論を提示したのが筆者であつた。ところが最近川勝守氏が「張居正文量策の展開」なる論文を公表した⁽⁴⁾。三節より構成されるこの論説は問題視角も鋭く實證的にも手堅い好論文である。それにも拘らずここに筆者が蛇足を加えようとするに到つたのは、張居正文量に對する事實認識が氏と筆者とではかなり喰ひ違つており、また氏の論考には數々の問題點が認められるからである。疑問點を六箇條に注記したから参照戴き度い⁽⁵⁾。これらの問題點を踏まえつつ、筆者は張居正文量の全體像を把握することに努めた。まず何故萬曆八年という時點で全國土地丈量が敢行されねばならなかったかの必然性を但に地主對策のみから説明するのではなく、丈量に先行して行われた關連諸政策にもその必然性を搜し出した。次に丈量の實態を追究するに際しても、理念と現實の丈量像を峻別することに努力し、殊に但に國家側のみから丈量の實態を捉えるのではなく、これに地主層が如何に對應したかをも併せ追求した。そしてこの丈量の結果どのような成果が全中國的に得られ、ま

たそれがその後の歴史的變遷に如何なる影響を与えつつあったかという展望までが得られるように努めた。論說作成に當つては嘉靖・隆慶期の丈量を検討した結果得られた認識をも屢々前提としてゐるため、別稿「明後期の丈量に就いて」(史林第五十四卷第五號)をも併せ参照して戴き度い。以下に筆者の理解してゐる張居正の丈量像を述べることにしよう。

一 丈量の前提

萬曆二年廣西巡按唐鍊の上奏によれば「最近、税の滯納が目立ち完納する者は三割にも満たない。耕地が借り物だといつたり、荒地だと偽つて納税しない者がある。大地主の兼併は追究することが出来ない」といふ⁽⁶⁾。また順天府府尹施篤の上奏でも「富豪が土地ばかりでなく人間までも兼併し、詭寄・影射等を行うが、地方官は見て見ぬ振りをして追究せず、爲に農民は土地を捨てて逃亡し、税役が益々重くなる」と指摘してゐる。ここに言われる「地主層の土地兼併と脱税——徵税額の虧缺(虚糧)——小農民への追徴加税(包賠)——小農民の土地放棄」と圖式化される問題は、十六世紀初頭以來殊に江南等の地方で屢々議論されて來た社會矛盾であり、半世紀後の萬曆初年には廣西のような邊地にまで及ぶといふ、まさに全國家的な歴史的課題になつたことが判る。但し、この社會矛盾が嘉靖・隆慶期の江南に於いて證明出來得た如く、この時點でも直接生産者佃戸層にまで及ぶ追徴加税として作用したかどうか、またかかる生産關係の亂れが全國のうちの程度の地域にまで定着していたかが、當然問われねばならないが、本稿に於いては果し得なかつた。しかし少くとも地主側の納税忌避に始まる社會矛盾がほぼ全中國の問題になりつつあつたことは明らかであろう。そしてかかる問題への抜本的解決策として試行錯誤されて來たのが、土地丈量とその後の税役改革であつた。⁽⁶⁾

そこでまず萬曆初年以來内閣首輔となり全國土地丈量を率先して實行させた張居正自身の丈量觀を探ろう。早く隆慶二年に六事を述べた際、國家財政の不足する原因の一つとして、富豪が兼併しながら税糧を納めず、小農民が被害を受けていることを指摘してゐる。⁽⁶⁾ また萬曆初年應天巡撫宋儀望に宛てた書簡では、大地主は土地を七萬頃も持ちながら時として

納税しない。隱田を持つのは大地主であつて細民ではない。隱田を處置すれば小民が包賠の苦しみを免れられるという。⁽⁹⁾更に萬曆五年頃新任の應天巡撫胡執禮にも引續き均賦への協力を求めている。⁽¹⁰⁾また萬曆六年以來福建で行われた丈量に對しては、擔當中の福建巡撫耿定向に三度の激勵文を送り、殊に全國的丈量開始後に山東巡撫何起鳴に宛てた手紙では、清丈は小民が確にその恩惠を蒙るが富豪には不便なものだとまで斷言している。⁽¹¹⁾かかる地主層の大土地兼併に對處して小農民を重加税から救い出そうとする張居正の清丈觀は、國家の當該歴史段階を正しく認識した見解であるといわねばならない。從來もつばらかかる側面から全國土地丈量の必然性が強調された。⁽¹²⁾

ところが若しこのような小農民の利益になる丈量のみを行うのなら、張居正は徐階のような松江の大地主とは當然對立せねばならないが、彼らの友誼は張居正の没する萬曆十一年まで維持されたという。⁽¹³⁾また清丈をそれ程有効な政策と考えるのなら、海瑞のように實績もあり實行力をも備えた人間を全國土地丈量の專官に任じてもよさそうなものだが、むしろ遠ざけている。⁽¹⁴⁾これは一體どういふことなのだろうか。そこで改めて張居正の私信を讀み返すと、「地主層の惡業に對して民衆は抵抗出來ない。頼ることの出來るのは國家の法だけだ」といい、地主層を根底から抑えつけるのではなしに、「その百分の一の蓄積をでも出させて、積り積つた滯納税を無くすべきだ」といつている。⁽¹⁵⁾また山東巡撫何起鳴や江西巡撫王宗載に宛てた手紙では、清丈は百年に一度の大事業であるとして一攫千金的效果をねらっていたことが判る。⁽¹⁶⁾更に張居正の從來の施政方針は必ずしも人民ことに貧民の爲にする政策では無く、富國強兵、つまり國家利益の優先にあった。⁽¹⁷⁾とすればこの全國土地丈量策も但に大土地所有對策だけからではその必然性を説明し切れず、むしろ國家の關連諸政策の中にもその必然性を求めねばならないだろう。

そこで明朝國家の置かれていた財政事情を顧みると、嘉靖二十九年俺答が大舉して入寇したため、その後の邊防・軍餉費は募るばかりで、嘉靖末年まで國家の財政收支は赤字を續けた。⁽¹⁸⁾穆宗皇帝即位後、監察官を遣わして賦税を督促させたり屯田鹽法を整理させたりする。⁽¹⁹⁾また隆慶四年には直隸巡按楊家相によりあらゆる財源の檢討と水田の開発などが計られ

た。萬曆期に入ると、「天子の節約、滯納税の減少、追徴の取り立て、邊費の削減、豐年などが重なって、財政にかなり餘裕が出来つつあった。ところが萬曆五年六年と歳出は増加するが、反って歳入が激減した。戸部に照會して理由を問うと、減税が増えたことや追徴收入が減ったことなどの爲だという。このまま後一年も経てば、滯納分の取り立てによる收入はますます減るだろうし、新たな財源も期待出来ない。この上更に四方に水災や旱害が起ればどうするのか。官から出そうにも倉庫は空だし民から取るうにも取れない。だから内外の經費で無益なものは省き、効果のないものは止め、歳入を歳出より増加させねばならない」というのが、萬曆七年三月當時、即ち丈量の前年に於ける張居正の財政觀だった。

かかる張居正の體系的財政認識を可能にしたのは、その上奏の題目にもなっているように、戸部の提出した掲帖、即ち萬曆四年二月に初めて完成した萬曆會計錄があったからである。會計錄はその後改訂が加えられ、萬曆九年四月に修正を終え、十年二月には四十四冊が刊行されたという。そしてこの會計錄のようなものが編纂されたことによっても窺えるように、萬曆初年以來様々の財政整理が國家の政策として敢行された。整理の範圍は多岐に涉るが、いま税役收入に關わる部面に論旨を限定することしよう。

そこでまず指摘せねばならないのが徭役徵收をめぐる國家と地方との對立である。神宗皇帝即位後すぐに出された詔敕には「各地の徭役には元來正數がある。毎年地方官が勝手に別項の名目を設けて追徴し、またあらゆる無名の供應費のため、役銀ばかり盛んに取り立てられ賦税が取れないのは憂うべき事態だ。詔敕が到着し次第、地方官は速やかに改正せよ」といっている。同様の指摘が戸科給事中光懋や張居正によっても行われるが、まだ効果が薄かったためであらう。萬曆七年八月に給事中郝維喬の上奏を受たけ戸部の覆奏では、各地で條鞭實施後に積み増しされた里甲・均徭・公費等で、小民の出すものは減じたり止めたりしてはどうかといつて許可されている。しかもこの奏請によりほぼ全國的に里甲・均徭・驛遞・公費銀の一大削減が展開される。いま明實錄に報告のあるものを一覽すると第一表が得られる。

第一表 萬曆初年徭役銀削減表

地方	報告者	削減額(兩)	實編銀(兩)	削減率(%)	報告日
順天遼	張夢鯉	三、五四四	九一、五〇〇	三八・五	九年十二月庚子
保定	辛自修	一五、八五〇	八〇五、二八五	一二・四	九年正月丙戌
宣大	鄭 維	九、四〇四	一一、七〇〇	三二・五	九年五月丙戌
大同	鄭 維	三、八四〇	一一、七〇〇	三二・五	九年十二月壬寅
山西	高文薦	五、七〇〇	一一、七〇〇	三二・五	九年七月甲寅
山西	高文薦	五四、四〇〇	一一、七〇〇	三二・五	九年七月甲寅
山西	高文薦	二、一八〇	一四、〇三〇	一五・七	九年七月庚午
山東	鄭 維	二、一八〇	一四、〇三〇	一五・七	九年七月庚午
山東	鄭 維	二、一八〇	一四、〇三〇	一五・七	九年七月庚午
河南	褚 鐵	九六、四〇〇	二四七、七〇〇	二九・〇	八年閏四月辛酉
河南	褚 鐵	一一八、七二四	二四七、七〇〇	二九・〇	八年九月丙戌
鳳陽	凌雲翼	一〇〇、〇〇〇	六七二、七七七	一五・七	八年九月己巳
鳳陽	凌雲翼	一二五、一九六	六七二、七七七	一五・七	九年二月癸卯
應天	孫光祐	六、〇六三	六八、一三〇	二二・五	九年六月乙未
應天	孫光祐	一九、七五〇	六八、一三〇	二二・五	十年二月癸巳
應天	孫光祐	七八、五〇〇	七七八、三八〇	八・九	九年三月乙酉
浙江	孫光祐	一、五〇四	七七八、三八〇	八・九	九年四月甲寅
浙江	孫光祐	七八、七四〇	七七八、三八〇	八・九	九年三月丙戌
江西	王之垣	一七、七三〇	一二六、七九〇	三四・三	十年三月癸未
江西	王之垣	五三、六八〇	一二六、七九〇	三四・三	八年十一月癸未
湖廣	王之垣	六六、二五〇	一二六、七九〇	三四・三	九年三月甲子
福建	王之垣	二九八、〇〇〇	一二六、七九〇	三四・三	八年十二月己酉
福建	王之垣	二九八、〇〇〇	一二六、七九〇	三四・三	九年二月癸亥
福建	王之垣	二九八、〇〇〇	一二六、七九〇	三四・三	八年閏四月己未

※ 萬曆廣東通志卷七徭役の條による

福建	兩廣	廣東	廣西	貴州	貴州
劉堯誨	梅淳	郭應聘	郭應聘	王緝	
六四、五〇〇	五四、三四〇	七七、七四五	一八、七四一	二、一〇〇	一、二二八
		五一六、六三七	一七三、四〇〇	一〇、三三〇	
		一五・〇	九・二	一一・六	
八年 九月丁亥	十年 正月己巳	九年※	九年 九月癸未	十年 二月壬辰	八年十一月乙亥
			九年 七月甲寅		

これによれば削減の規模は三〇パーセントにも達するものが多い。しかしただ徭役銀を一時的に切り捨てるだけでは恒久的効果を持たないから、不時の災害復舊等に備えて地方に蓄積されるべき積穀額の規模を劃一的に設定すべきことが唱えられ、江西・浙江・直隸・福建等の地方では、主に三段階を設けて積穀額の上限が決められた。つまりこの徭役銀削減政策は、基本的には徵稅權益をめぐる國家と地方との對決であり、地方官の取り過ぎ分を減じて國家の賦稅收入の安定化を企てるという、中間搾取の否定であったといえよう。

また兩稅收入ことに土地丈量に就いても、萬曆初年以來明朝國家の姿勢はすっかり轉換を遂げている。神宗皇帝即位直後の詔敕では、土地を丈量して稅糧を割り付け直すことは本來良法であると述べている。これは嘉靖期以來の地方的丈量に對し、國家が丈量を禁じよう禁じようとし續けたのとは正反對の政策轉換である。國家の姿勢轉換を反映するかのよう³⁹に、萬曆初年以後も地方的丈量實施例の輪は廣がるが、しかし丈量を禁止せよという意見や丈量が途中で中止された事例は全く見當らない。そしてかかる一般民田の事例ばかりでなく、むしろ以前にはあまり見られなかった新漲地・荒地・屯田・莊田等に對する丈量が、一貫した顯著な政策のもとに遂行されていることを次に述べよう。

まず川や海の沿岸で新たに砂洲が生じた場合、そこが耕作されながら課稅されないままに放置されているものが多いか

ら、これに課税して虚糧分に充當すべき旨の詔敕が出される。この詔に應じて萬曆三年に戸科給事中光懋が南直隸・湖廣・江西等の調査を要請して許可され、萬曆六年には巡按直隸御史林應訓が江蘇の崑山・嘉定二縣の實態を詳報して丈量を許され、更に翌年には應天巡撫胡執禮が丹徒縣の情況を報告している。これらの事例は一方に於いて地主層の大土地所有を牽制するばかりでなく、むしろ國家が積極的に新たな財源を摸索し始めたものと見做さねばならないだろう。

また荒地に就いても神宗即位直後に詔敕がある。これによれば、官田や民田の荒閑地は土着人と他國者とを問わずに耕作させ、三年後に課税せよといっている。この詔敕に應じて山西等では早速流民を招集して荒地の開墾が始められた。しかも注意すべきは、ただ單に開墾を奨励するだけでなく、その裏付けとして國家が流民等に生産手段を給與したことだろう。直隸巡撫邵陞によれば、一人につき田土五十畝と牛一頭その他、種子まで支給したことが窺えるが、同様のことが萬曆六年鳳陽巡撫經由で營田僉事に轉行された詔敕にも見えている。そしてここに開墾された田土が、三年乃至六年後には課税され、それが荒糧分に充當されることになっていたから、國家は意欲的な勸農政策を通して税糧の原額確保を企てていたことが明瞭である。またこの勸農政策が一地方的に實施されたものでなく、全中國的に實行されたことは、萬曆八年より以前に全國から招撫開墾文冊が提出されたことよって證明されよう。

屯田が權門勢家の侵占によって有名無實化しつつあったことは既に清水泰次氏や王毓銓氏によって詳述されたが、萬曆初年以來兵科給事中劉鉉、戸科給事中光懋等の人々により逐一丈量して屯田を復活すべきことが要請され許可されている。その際國家が流民を招集して生産手段を給與し、彼らに開墾させて三年以後に課税し、屯田の原額を滿たそうとする勸農政策である點では、荒地に對する政策と軌を一にするものといえる。更に注意したいことは、これらの勸農政策が同時に治安對策をも兼ねていたことだろう。何故なら先程來の勸農政策に關わる記事には、流民を招撫することが前提條件として含まれていることが極めて多い。ところが戎筌も既に指摘したように明後期には農民戰爭が頻發し、殊に嘉靖期後半から萬曆初年は盜賊に關する記事が明實錄等に多く見受けられる一時期でもある。従ってこの勸農政策は同時に一方では

生産の場を失った流民達をもう一度體制内に呼び戻して生産に携わらせ、いずれ國家の收奪對象とすべきことを期待しつつも、先づ民心の安定化を計ったものと見做さねばならない。

莊田に就いては嘉靖隆慶期からも屢々その兼併侵占を抑制すべく丈量すべきことが説かれたが、効果があまり上らなかつたと見え、萬曆七年から莊田に對する徹底した丈量が開始される。南北兩直隸・山東・陝西の各勦戚莊田に溢額や脱漏の有るか無きかを官を遣わして丈量し、規定以上の餘地には課税しようとするものであつた。しかもその際、欽賜の優免數以内のものか、何か他に確かな證文のあるものでなければ、祭祀に必要な二頃ばかりの土地だけを莊田と認め、他は全て民有地と同様に課税しようという嚴格なものだつた。これが實施されたことは山東や北直隸から報告があることによつて判る。この莊田の清丈は既述の大土地所有對策の一環であると同時に、本來國家の干涉を許さない莊田にまで國家がメスを入れて積極的に社會矛盾を正そうとしていることが判る。

以上萬曆八年十一月に命じられる全國土地丈量の前提として、基本的には生産過程にも稅役收奪にも破綻を來たし兼ねない地主層の大土地兼併を抑制すべき對策として現われたものが丈量策ではあるが、しかし同時にそれは萬曆初年以來國家の採用し來たつた諸政策の頂點に立つものでもあつた。何故なら國家は一貫して財政收入の増大を企てて居り、地方と對決して徭役銀の削減を行つてまで兩稅收入の安定化を計り、また民田・新漲地・屯田・莊田等に於ける地主權勢家層の不正を正して正規の課税を企てているほか、殊に荒地や屯田地に於いても流民を招撫して開墾させるという「新規財源の摸索」兼「勸農治安對策」をも併せ企てるといふ長期的展望に立つた一連の政策が實施されていたからである。そして張履祥もいうように、張居正は例の會計録を見て、その田土數に疑念を持った所から九年の丈量が始まつたのである。とすればその狙いは失額のある所には必ずや弊害があるだろうから、その弊害を國家の名に於いて是正するということになる。この間の事情をもっとも雄辯に物語るものは、萬曆十年三月に清丈の成果を報告するとともに尙一つ民の憂いとなっている錢糧の帶徴に言及した上奏で張居正が奇しくも漏らしているように、この丈量も亦、德惠は朝廷より出すべきであ

り、若し地方官の奏請を待つてこれを行えば、恩は下に歸し怨は上に歸せられるであらうから、先走つて民意を得ようとしたという、極めて國家政策的な上からの丈量が行われたとせねばならないだろう。従つて嘉靖・隆慶期に於いて、丈量をテコとする新規徵稅體系樹立への主導權を官豪地主層が掌握していたのに對し、今回の丈量ではそのヘゲモニーを國家側に取り返し、國家規格による新規徵稅體系の樹立が目差されていたものといえる。そこで次に全國土地丈量の實態を様々の視點から檢討することとしよう。

二 萬曆九年の土地丈量

(一) 當爲の丈量像

丈量は萬曆八年十一月に命じられた。この詔敕に於いて丈量が本來どうあるべきことが求められていたか、その内容をまず検討しよう。⁸⁰⁾ 詔敕の文面は八ヶ條より構成されている。原額の失われているものは丈量せよといい、また課すべき稅額を復活せよといっているから、この丈量は基本的に稅額を額面通り取るための丈量であるといえる。即ち稅の滯納を無くし國家の財政を再建するための政策であつたことが判り、これは前節に於いて確認した萬曆初年以來の國家の政策ともよく連續する。従つて滯納の無い所では丈量しなくてもよいと斷られている。

その際、納稅者と納稅額の決定を、軍戸や民戸という戸籍によつて決定するのではなく、誰が耕作していようと、耕されている土地が民田であるか屯田であるか等の土地ごとの條件だけで決定すべきことをうたっている。これは明初以來國家の採つた徵稅方法とは大いに異り、嘉靖期以來の地域的改革で、納稅の評價基準を田土額の多寡のみによつて決定しようとしつゝあつた方向性を、國家がみずからの方針として踏襲し採用したことになる。

この他、丈量には巡撫以下知縣までの官僚が事に當るべきこと、地主に隱田の自首を勸告していること、丈量に期限が設定されていたこと等が判るが、この詔敕の文面だけでは具體的に何をどう求めていたのか明らかでない。そこで他の史料をも援用して、もう少し當爲としての丈量像を究めておこう。

古今治平略によれば賦の割り付けを行つて民病を甦らせることが目的であつて、決して地利を盡して増税を求めたのではないといっている。また唐鶴徵によれば、張居正の丈量は本來ただ税の割り付けを計つただけのことで、決して原額を増加させることを期待しなかつたという。また浙江の義烏縣志によれば、税の割り付けが行われ民間の虚糧や包賠の弊害がすっかり無くなったといっている。これらによつて今回の丈量ではただ國家の徵税原額を確保するばかりでなく、均糧をも併せ行ふべきことが期待されていたことが判り、これも嘉靖期以來の丈量方針を國家が踏襲したことになる。しかし江南地方に於いて既に地主規格の丈地均糧が實施されていた地方にとつてみれば、再度ここに實施される丈地均糧とは、國家規格の再點檢を行うことになるが、これは既成の均糧では社會矛盾が十分解決し切つていないとする張居正の事實認識に支えられたものであり、かかる點からも今回の丈量が國家と地主層との對決下に展開されようとしていることが判る。

また丈量した結果原額以外に出て來る丈出餘地がどう取り扱われたかという点、山東巡撫何起鳴の報告では、嘗て荒地で包賠させられていたものは丈出餘地を割り當てて減ずるといふ。また江西からの報告によれば、原額外の丈出地は毎年小民が包賠させられていた虚糧分に割り當てるといふ。また薊遼巡撫吳兌の報告によれば、丈出餘地を失額分の税糧に割り當てるといふ。つまりこれら丈出餘地の取り扱い方法は前節の荒地や屯田に對する政策にかなり近いものになり、これまで多くの人民が賠償に苦しんだ虚糧の穴埋め分に充當される方針であつたことが判る。すると均糧といい包賠對策といい、若し豫定通り丈量が行われれば、一方に於いて人民の苦しみを救ふことが出來、他方國家の安定的財源をも確保出來るといふ、まさに民便と國益の兩方に役立つバラ色の行政改革が期待されていたことになる。

ではこのバラ色の丈量をどのような形で國家は保證しようとしていたのか。丈量の成果は當初賦役黃冊を作り代えることによって把握しようとしていたものと考えられる。というのは清丈の詔敕が下された僅か九日後に黃冊を作ることが命じられている。しかもこの「攢造黃冊」命令を明實錄に残されたものによって見れば、戸口を調べよ、里書を取り締め、寄莊をあげ、詭寄は別にせよ、賣買に氣を付けよ等といっている。これはいわば清丈の注意書きのような命令であり、今回の丈量結果をすぐ黃冊上に留めよという意味にしか理解出来ない。事實今回の丈量の直接的導火線となった福建での丈量では、印刷して書物としてから黃冊に留めるよう指示されていた。ところが黃冊を作り改めることにはもう少し別の意味が含まれていた。南京戸科給事中王蔚によれば、隆慶頃から清丈實徵文冊が作られ黃冊がないがしろにされて來た。

しかし本來黃冊には舊管・新收・開除・實在の各項目が書かれる筈だから舊冊を轉載することは許されない。そこでこの際本來の攢造黃冊様式で作直したら實徵錢糧が賦税となり實徵人丁が徭役となるから、いわゆる實徵文冊と同じものが出来るだろうといっている。これは國初の祖法に戻そうとする意見であり、先の徵稅屬地主義やバラ色政策のように現實に見合つた國家の對應を求めているのではない。しかしかかる強固な保守的意見も幾分反映されて、今回の丈量では黃冊の改造が同時に行われようとしたことは間違いない。だからこそ江蘇の武進縣に見られるように、黃冊書手二名が空役中の者から選ばれ郷總冊を作つたのである。

最後に是非指摘しておかねばならないのが、丈量と併行して優免の整理が企てられたことである。萬曆邸抄九年四月の條に掲げられた湖廣總督陳省の上奏によれば、「張居正の故郷で息子の張嗣修が自家の田糧の實態を調査した所、稅糧額は七十四石分しか無い筈なのに實際は六百四十石が優免となっている。差額は親戚や家僕が勝手に優免權を惡用して彼等の私田分の徭役負擔を逃避したものであるから今後課税したい。そしてこの際あらゆる官僚に命じて自家の優免情況を調査させて濫用を禁じるばかりでなく、優免額、監生や胥吏の定員等を石に刻んで全國各縣の城門に立てよう」といっている。これは權力者張居正に對する多分に追従を含んだ奏議ではあるが、しかし翌年正月の戸部の題奏によれば、この優免の實

態調査が全國に命じられ、少くとも浙江では改正が計られたことが判る。そして丈量と同時に優免の整理が計られたことは、丈量の前提として地方財政の整理が敢行されたことも併せ考えれば、明朝國家はヒステリックなまでに官僚層の中間搾取をチェックしようとし續けていることが明白である。

以上によつて丈量に託した明朝國家の期待がほぼ明らかになった。現實主義と復古主義とが混在したまま、しかも民便にも國益にも資するという兩目標を持たせているが、しかしいづれにせよ原額の虧缺を回復し、隱田や詭寄をあばき出し、その上優免の整理までをも行おうとしている以上、この丈量政策は基本的に官僚層をも含めた廣義の地主支配者階級の中間搾取を否定し、國家の支配理念を根本的に再建すべきことが企てられたものであると評價せねばならない。つまり公式に表明される限り丈量政策に於いては國家の敵對者として地主層が存在するわけであるから、當該歴史段階に於いて既に國家と地主層とが共存關係にあるとは決していえないだろう。ただそうといつても、個々の官僚の私的恩惑としては先の張居正の見解にも顯著に見られるように、決して地主層を根底から取り潰そうとはしていなかったものと考えられるが、しかしやはり公式的にはあらゆる中間搾取を否定すべきだと考えられ、それが丈量政策という一點に凝集されたものと見做さねばならない。それではこの國家の期待が實際の丈量行爲を通じてどのように體現されつつあったかを以下に述べることにしよう。

(二) 丈量の實態——その一——

丈量に寄せる國家の期待がこれ程大きなものであるからには、期間を限つて逸早く結果を得ようとしたのも蓋し當然といえるかもしれない。いま各巡撫からの清丈報告がいつ提出されたかをまとめれば第二表が得られる。これによれば最も早いのが北直隸からの萬曆九年四月であり、最も遅いのが雲南からの十一年五月である。すると五ヶ月乃至二年六ヶ月を

第二表 萬曆九年清丈報告表

地方	報告者	報告日
福建	勞堪	八年九月庚辰
全國	詔敕	八年十一月乙亥
順天	(吳兌)	九年四月己未
山東	何起鳴	九年九月乙亥
江西	(王宗載)	九年十二月己亥
保定	辛自修	十年正月庚午
大同	(賈應元)	十年正月庚午
薊遼	吳兌	十年二月丁酉
遼東	周詠	十年三月甲子
薊遼	吳兌	十年三月丁卯
山西	辛應乾	十年三月甲戌
宣府	蕭大亨	十年七月丙辰
應天	孫光祐	十年七月辛酉
地方	報告者	報告日
貴州	王縉	十年七月癸亥
廣西	郭應聘	十年七月甲子
浙江	張佳胤	十年七月己卯
鳳陽	凌雲翼	十年八月庚寅
河南	褚鐵	十年九月戊午
湖廣	陳省	十年十月癸丑
寧夏	晉應槐	十年十一月乙卯
四川	張士佩	十年十一月戊午
兩廣	陳瑞	十年十二月壬辰
陝西	蕭慶	十年十二月戊申
陝西三邊	高文薦	十一年正月丁卯
甘肅	王垞	十一年二月戊戌
雲南	劉世曾	十一年五月庚子

要したことになるが、しかし大半は十年末までに揃っているから、約二年で完成したことになる。ところが地方ごとの特殊事情や不慮の事故等を考え合わせれば、極めて短期間に集計までが行われたことになる。尤も張居正自身は巡撫に宛てた書信であまり急ぐなと繰り返して述べてはいるが、現地に於いては大變急がれた。海瑞によれば實地に於ける丈量は僅か三四ヶ月程度で行われたという。

ところがこれだけ早急にしかも全國的規模で丈量を敢行するには、背後に強權的強制力を必要とするだろう。強制力の裏付けを嚴罰主義と經費の官給に見ることが出来る。各巡撫からの清丈報告の文末には丈量に功績のあった者と怠慢であった者との地方官名を列擧しそれぞれ賞罰すべきことを記している。また九年十二月には巡撫からの報告に先立ち松江知

府閩邦寧ほか合計四名の地方官が怠緩を理由に名指しで咎められ、給與を停止されたというから、如何に嚴罰主義が採られたかが判ると同時に、これら名指しで處分された者が、いずれも江蘇や安徽地方の知府達であり、その處分理由が遅延怠慢にあったことは、取りも直さず、國家規格の再丈量に對し在地民間人の協力が積極的には得られなかったこと、つまり地主層がサボタージュを以て對應することのあったことをも暗に示しているだろう。また經費に就いては江西の安義縣志に民間の一錢をも使わなかったといっている。これは賦役黃冊が併造されようとしたことと密接な關係があり、常州府志によれば、丈量に必要な紙代などの費用は毎年の均徭銀の殘額で支給するといっている。つまりこれは先に削減された徭役銀の餘剰分で今回の丈量の經費が賄われたことを物語るだろう。そして嚴罰と官費に裏付けられた強制的丈量であつてみれば、末端の責任者である知縣等には如何にも苛酷な任務であつたことになる。今回の丈量を江西に於いて始めから終りまで擔當した張棟の證言によれば、丈量に際して知縣は縣廳に歸ることを許されず、また書類作りの時には椅子に坐ることも許されなかったといっている。かかる強制を餘儀なくさせた最大の原因は、勿論今回の丈量が國家的要請に基づく上からの丈量だつたことにあるとせねばならない。その結果當初全く豫期されなかった弊害が地方官出身の手によつても行われることになる。この間の事情を張棟は更にこう述べている。「巡撫から司府へ、司府から州縣へ、州縣から業戶へと強制的な丈量が行われた。現地に於いては實際に弊害が有るか無きかに關らず全て量られた。丈量を凝る者には直ちに處罰が加えられた。民衆の意思は全く不問に付せられた。期限が非常に嚴格に守られ星火の如く急がれたため、地方官は上からの命令に迎合して急いで事を行ない、災禍を逃れて自己保全を計ろうとばかりしていた」と。また河南の臨漳縣では、功績を立てようと志す地方官が迅速でありさえすればよいと思つて量りもせずに報告を濟せたという。これらによつて明らかになように期限付きの強權的丈量では中央と地方とで全く意思の疎通を缺いていた。詔敕文面では滯納の無い所は量らなくてもよいと斷られていたが、現地では人民の意思が殆んど無視され、實情を調べもせずに全て量られようとした。しかもあまり性急に事が運ばれたため地方官達は自己保全ばかり企て非常に浮き足立っていた。ここに地主層の丈量

に對處すべき間隙があつたことになるのだが、この點は弓尺の問題とも合わせて次款に於いてまとめて論ずることとし、當面このように意思の疎通しない丈量ではありながら、地方段階に於いて少くとも形式的にどのような丈量が實施されたかをまず確認しておこう。

地主の城居化が進み寄生地主制の發展していた江南地方では、丈量方法にも非常な困難を伴つた。海南島瓊山縣の故郷で休職中の海瑞が、當地の丈量擔當責任者である海南道按察副使唐可封との間に交わした丈量方法をめぐる論戦によれば、海瑞の所有地は那社一圖にあり、その糧籍は海口二圖にあるが、唐可封は糧籍地の排年里甲を使って丈量させようとしている。これでは土地の正確な所在地も科則も知ることが出来ない和海瑞は繰り返し指摘する。ところがこれに對して唐可封は、部議によつて便宜に事を行なうことが許されているのだと反論している。今ここに紹介した海南島の事例は恐らく特殊なもので、一般には田籍地の排年里甲等を使って丈量が行われ、川勝氏が江西の事例として紹介した傳票を活用して、坐圖冊・推量冊・收糧冊にまとめる丈量方法が廣く採用されたものと考えられる。ただそれにしても重要なことは唐可封の言葉にも見えていたように、若し便宜行事の範圍がかかる丈量方法にまで適用されるものなら、たとえ全國的丈量とはいえその内容や成果にかなり大きな地域差のあることを豫想せねばならないことであらう。

地域差を端的に示すのは丈量後の科則の決定である。量り出された實畝數にプラスマイナスの折算を施すことによつて徵糧地一畝というものを人爲的に書類上に設けて科則を一則化してしまうという稅畝制を採用するのか、それとも實畝數をそのまま残して科則を數則化するかに就いては全く地域差が著しかった。しかし科則の決定は縣の原額から逆算される方向にあり、また稅畝制を採るにせよ實畝數則制を採用するにせよ、事實上每畝の稅額の差違は丈量以前よりは大幅に縮められ一律化される方向にあることを、既に川勝氏は幾多の實例を擧げて實證した。この成果に對しまずここでは次の二點を追加せねばならない。第一點はたとえ稅畝制を採るにせよ北直隸眞定府元氏縣に見られるように、寬郷と狹郷の折算率の差違が三倍に及ぶ程大きな所があつたということである。これは明初以來設けられた廣畝狹畝の制度が遂に今回の

丈量でも根本的には是正されなかったものと考えられる。第二點は科則の決定が土地の生産力を全く無視したものであると川勝氏は斷定するのであるが、必ずしもそうとはいえない。というのは海瑞の具申書によれば、二熟の田は一等とし一熟の田は二等と決められているが、一熟の田の方が反つて收穫が二倍ある場合もあると指摘している。これによつて明らかになように地方官は科則の決定に際し、嚴密な意味での反當收量の多寡というような判定しにくい事柄によるよりは、むしろその土地ごとの生産性を幾分考慮に入れつつも、機械的に判定しやすい一毛作地か二毛作地というような基準で科則を決定しようとしていたことが判る。これは海南島の特例と見るべきではなくむしろ、全國的にその地方ごとの實情に合わせた形でかかる形式的便宜主義が採用されたと見做すべきであらう。ただその場合にも、たとえ如何ように便宜主義が採られようとも國家は徵稅の總額が満たされればよいのだから、國家意思とは何ら矛盾するものでないことを確認しておかねばならない。

更に形式を整える上で見逃がすことの出来ないのは、今回の丈量ではその對象地としてどれだけ土地が量られたかという問題である。民田が實弊の有無に關らず全て量られる傾向にあったことは先の張棟の言葉にも見えていた。そこで他の地目に就いて調べてみると、屯田を量るべきことは詔敕の文面にもあり、清丈報告にも屯田數が殆んど全て記載されているから屯田も亦量られたことは疑いない。また清丈報告中には薊遼・寧夏・陝西・陝西三邊の各巡撫からのものに見られるように荒地の地積數を伴っていることが多い。従つて今回の丈量では荒地も亦同時に量られたものと考えられる。更に萬曆十年五月には鹽場も併せ丈量すべきことが命じられている。ただ最も困難だったのは莊田に對する丈量だったようである。大同巡撫賈應元の上奏によれば「管内には王府が多くあり彼らは丈量を妨害する。朝廷に陳情に行くといつて鎮城を出て、このごろでは闖擄者は斬ると書いた黃旗を揮む。他の者も見て見ぬ振りをする。どうか處置して貰えないか」と訴えている。戸科給事中郝維喬もこの上奏を受けて「清查すべき土地は法によつて調べるべきであり、宗室と雖も特例を認めるべきではない。およそ全國の王府が買ひ取った田土は巡撫に調査させ、規定通り納稅させよう」という。すると

皇帝も動かされたとみえて「丈田均糧を妨げる者は宗室・官宦・軍・民の別なく、全て法によって重く處罰せよ」と巡撫に命じている。同様の事例が直隸巡按王國の上奏に就いても見られる。従って今回の丈量では莊田に對する丈量も併せ行われた。

すると民田・屯田・荒地・鹽場・莊田と中國の全ての土地に對する丈量が同時に行われたことになり、江南ではこんな詩が唄われたという。「山田も水田も皆量る。ただ滄海と青空を残すのみ。こんな調子じゃ渚までもが總量り。鷗も晝寢が出来やせぬ」と。そして全地目が量られたことはそのこと自體重大なことであるばかりでなく、更に注意しなければならぬことは、今回の丈量に先立って行われていた民田・屯田・荒地・莊田等に對する丈量が、いまや、より一層大きなサイクルで統一的に敢行されていることである。従ってこの丈量も亦、但に中間搾取を否定し税糧の原額を確保して財源の安定化を企てるだけでなく、同時に勸農治安政策をも兼ね備えた長期的展望を有する國家的事業の頂點に立つものであったと評價せねばならないであろう。

以上丈量の實態をもっぱら國家の側から形式的に追究した結果、期限着きの丈量で地方官が浮き足立ち中央と地方とは意思の疎通を缺いていたため丈量の成果にも地域差を想定せねばならないこと、地域差を端的に示す科則の決定では一般に便宜的形式主義の深化が見受けられるが、これは國家の徵稅安定化と背反しないこと、また丈量對象地から見れば全中國が量られたことになり、ここに丈量の隠された側面としての勸農治安政策が長期的には見込まれていたこと等を確認した。しかしかかる平板な探究だけでは歴史的真相に迫ることが出来ない。次款に於いて丈量の實態をより立體的に追究することとしよう。

註

- (1) 商品生産に就いては西嶋定生・宮崎市定・寺田隆信・藤井宏・佐伯有一・田中正俊・横山英等の研究成果があり、これらの動向をまとめて紹介したものととして佐伯有一「日本の明清時代におけ

る商品生産評價をめぐって」(『中國史の時代區分』東京大學出版會一九五七)、寺田隆信「商品生産と地主制をめぐる研究」(『東洋史研究』十九卷四號一九六一)、小山正明「明清社會經濟史研究の回顧」(『社會經濟史學』三十一卷一號一九六六)、寺田隆信「明清

時代における商品生産の展開」(『世界歴史12』岩波書店一九七二)がある。また中國に於いても『中國資本主義萌芽問題討論集(上)(下)(總)』(三聯書店一九五七、六〇)他多くの研究成果があるが、その一部を田中正俊「中國史學界における資本主義の萌芽研究」(『中國史の時代區分』前掲)、佐伯有「中國の歴史學界における資本主義萌芽に關する論争、その後」(『社會經濟史學』二十七卷三號一九六三)が紹介しているのでこれらを参照戴き度い。

また地主制に就いては北村敬直・古島和雄・西山武一・重田徳・寺田隆信・小山正明・傅衣凌・陳恆力・片岡芝子・安野省三・奥崎裕司・森正夫等の研究成果があり、これらを紹介したものに寺田氏や小山氏の前掲書、田中正俊「補農書をめぐる諸研究」(『東洋學報』四十三卷一號一九六〇)があるほか、最近の天野元之助「明代の農業と農民」(『明清時代の科學技術史』京都大學人文科學研究所研究報告一九七〇)、森正夫「明清時代の土地制度」(『世界歴史12』岩波書店一九七二)がある。

(2) 明代稅役改革に就いては清水泰次・沼田頼雄・梁方仲・松本善海・龔宮谷英夫・岩見宏・山根幸夫・藤井宏・山崎武治・田繼周・王方中・谷口規矩雄・栗林宣夫・片岡芝子・森正夫・小山正明等々の研究成果があるが、これらを適宜まとめたものに山根幸夫「一條鞭法と地丁銀」(『世界の歴史11』筑摩書房一九六二)、岩見宏「明代稅役制度の研究について」(『史憲』三號一九六五)、山根幸夫「明代徭役制度の展開」(東京女子大學學會一九六六)、寺田隆信「一條鞭法の研究史」(文化三十卷三號一九六六)があり、最近の成果は小山正明「賦役制度の變革」(『世界歴史12』岩波書店一九七二)に詳しい。

また地丁銀制に關する研究成果をまとめて紹介したものは殆んど見られないため略リストを次に掲げる。北村敬直「清代における租稅改革」(『社會經濟史學』十五卷三・四號一九四九)、史蘇苑「從明代一條鞭法到清代的地丁制度」(『新史學通訊』一九五四の九)、唐棟「略論清代的地丁制度」(『明清史論叢』湖北人民出版社一九五七)、重田徳「地丁併徵の歴史的意義への視角」(『東洋文化研究所紀要』五冊一九五八)、鈴井正孝「匠班銀の地租攤入について」(『集刊東洋學』八、一九六二)、藤田敬一「清初山東における賦役制度について」(『東洋史研究』二十四卷三號一九六五)、重田徳「清朝農民支配の歴史的意義」(『前近代アジアの法と社會』勁草書房一九六七)、同「一條鞭法と地丁銀との間」(『人文研究』十八卷三號一九六七)、同「地丁銀の成立と農民」(『中國史研究』五、一九六八)等がある。

(3) 佃戸の地位上昇に關しては、中山八郎・傅衣凌・仁井田陞・宮崎市定・李文治・一本杉玲子・清水泰次・田中正俊・佐伯有一・趙儼生・高昭一・孫祚民・李光璧・小山正明・横山英・史紹賓・安野省三・佐々木正哉・片岡芝子・戎笙・谷口規矩雄・小島晉治・細野浩二・小林一三・前田勝太郎等々の諸氏の研究成果がある。これらを適宜まとめて紹介したものに佐伯有一「明末の董氏の變」序(『東洋史研究』十六卷一號一九五七)、近藤秀樹「清代研究への覺書」(『東洋史研究』二十卷一號、一九六二)、田中正俊「民變・抗租・奴變」(『世界の歴史11』筑摩書房一九六二)、藤田敬一「中國における封建制研究の現段階」(新しい歴史學のために一〇四號一九六三)、松崎つね子「中國における農民戰爭史論争をめぐって」(『中國農民戰爭史研究』一、二號、一九六六)。

谷口規矩雄「明代の農民反亂」・安野省三「清代の農民反亂」・森正夫「明清時代の土地制度」(以上『世界歴史12』岩波書店一九七二)等がある。

- (4) 張居正の土地丈量に關する研究リスト。陳登原『中國田賦史』第八章第三十四項(商務印書館一九三六)、清水泰次「張居正の土地丈量について」(『東洋學報』二十九卷二號一九四二)、「明代土地制度史研究」に再録、藤井宏「明代田土統計に關する一考察」(『東洋學報』三十一卷一號一九四七)、宮崎市定「明代蘇松地方の士大夫と民衆」(『史林』三七卷三號、一九五四)、『アジア史研究』第四(三四二頁)、陳翎林「張居正評傳」第八章(中華書局一九五六)、鈴木正「張居正の研究」(『史觀』四十九號一九五七)、藤井宏『明史食貨志譯註』田制の注(『東洋文庫』一九五七)、朱東潤『張居正大傳』第十一・十二章(湖北人民出版社一九五七)、陳恆力「補農書研究」附件二(中華書局一九五八)、天野元之助「中國畝制考」(『東亞經濟研究復刊第三集』一九五八)、藤井宏「張居正」・山根幸夫「丈量」(『アジア歴史事典』平凡社一九六〇)、韋慶遠「明代黃冊制度」第五章第五節(中華書局一九六一)、王毓銓「明代的軍屯」上編十六(中華書局一九六五)、唐新「張居正新評」(中華書局、未見)、川勝守「張居正丈量策の歷史的意義(要旨)」(『史學雜誌』七十六編十二號一九六七)、西村元照「書評『明代土地制度史研究』」第五項(『東洋史研究』二十八卷一號、一九六九)、川勝守「張居正丈量策の展開」(『史學雜誌』八十編三・四號一九七二)。尚川勝氏のこの論文は本稿に於て屢々比較引用するため、以下川勝前論と略す。

- (5) 川勝氏の論說の疑問點を列擧する。第一に氏は論考の第一節第

二節に於いて收稅關係から丈量の原因と實態を捉えているに拘らず、第三節の結論部分では突然收租關係に論旨を飛躍させているため、全體の論旨が一貫性を失っている。第二に氏は張居正の丈量に就き史料的に行き詰ると必ず嘉靖隆慶期の丈量に關する記事を援用しているが、無前提的にこれらの丈量を等質のものとして扱い得るであろうか。何故なら嘉靖隆慶期の丈量が地主規格のものであるのに對し、張居正の丈量は國家規格の丈量であるともいえる。従つてこれらを同等に扱うことによつても歴史的な大きい流れを一應擲むことが可能ではあつても、むしろこれらを峻別することにより、歴史的發展段階と諸階層間の矛盾・動向等をトータルに把握することがより一層可能となるだろう。第三に理念の丈量像と現實に行われた丈量行爲とを嚴格に峻別することにより、歴史的實態をより浮き彫りにすることが可能ではないか。殊に本論では丈量に對する地主層の反應が全く見落されている。第四に氏は廣義の江南地方に於ける丈量のみを扱いその史的意義を深ろうとするのであるが、本來張居正の丈量とは全中國に對して行われたものであるから、たとえ形式的議論に偏るとはしても一應全國的趨勢を見落すことは出来ない。第五に通説的には丈量は途中で中止されたといわれているにも拘らず本論考では丈量の成果を高く評價している。丈量が成功したことと論據と丈量後の時間的變遷に論及することなく史的評價を下すことが可能だろうか。第六に氏は收稅の確保の爲には收租を安定化させねばならず、丈量が佃戸の地位上昇に對する國家と地主層との共通の危機意識の產物であることを力説する。ところがかかる鋭い指摘が論理必然的に十分可能なものであるにも拘らず、その論據は必ずし

も十分とはいえない。尙、個々の問題點は今ここに列挙しない。

(6) 明實錄萬曆二十二年二月己酉に

廣西巡按御史唐鍊奏。(中略) 近來民間拖欠、完納者不足三分之一。其間賊占拋荒固多。有藉以爲名、民隱其九者。有指荒爲詞、未荒而免者。有勢豪吞占、莫可誰何者。宜行司府州縣都司衛所、將一應額辦錢糧、如法追徵。(中略) 部覆。從之。

(7) 明實錄萬曆二十二年十二月丙辰に

順天府府尹施篤條陳編審事。方今地畝人丁日漸減少、且額外增役有加無已。細訪其故、或富豪并吞地土、或勢要強占戶丁、或飛瀾于詭寄、或漏網于影射。有司坐視莫敢誰何、遂致閭閻小民、甘心拋荒田產、逃移四方、又何怪乎。丁糧漸減而賦役愈重耶。(中略) 一、議流寓人戶、多係富豪名爲寄莊、影射差役、甚至田畝數倍于土著之民、而差役分毫與。宜即令入籍、與土著一體當差。(中略) 部覆。從之。

(8) 嘉靖隆慶期の丈量に就いては目下「明後期の丈量に就いて」なる小論(史林第五十四卷第五號)を引續き作成中である。本論說ではこの時期の丈量を検討した結果得られた實證的成果をも前提としている箇所が多々あるので早急に發表したいと考える。既成の研究でかかる問題に論及したものは、森正夫「十六世紀太湖

周邊における官田制度の改革(上)(下)」(東洋史研究二十一卷四號、二十二卷一號)、や川勝前論(一)がある。

(9) 張太岳先生文集卷三十六「陳六事疏」。尙、明實錄隆慶二年八月丙午にはその抜粹が載せられている。

(10) 張太岳先生文集卷二十六「答應天巡撫宋陽山論均糧足民」。尙

「明督撫年表」に據れば宋儀望は萬曆元年から四年十一月まで應天巡撫だった。

(11) 張太岳先生文集卷二十九「答應天巡撫胡雅齋言嚴治爲善愛」。

尙、「明督撫年表」に據れば胡執禮が應天巡撫だったのは萬曆四十年十月から七年七月までのことである。

(12) 福建の丈量に就いては、明實錄萬曆六年十一月乙亥、また張太岳先生文集卷三十一「答福建巡撫耿楚侗談王霸之辯」、同卷「答福建巡撫耿楚侗」、同書卷三十二「答福建巡撫耿楚侗言致理安民」

(13) 張太岳先生文集卷三十三「答山東巡撫何來山」に

清丈之議、在小民實被其惠、而於官豪之家、殊爲未便。

(14) 朱東潤「張居正大傳」(前掲、二八一—二頁、三〇六—一〇頁)、川勝前論(一)(五頁以下)。

(15) 朱東潤「張居正大傳」(前掲、二七頁)

(16) 吳晗「論海瑞」(吳晗編「海瑞集」序文八—九頁、中華書局一九六二)

(17) 張太岳先生文集卷二十九「答應天巡撫胡雅齋言嚴治爲善愛」に夫富者怨之府。利者禍之胎。而人所以能守其富、而衆莫之敢攘者。特有朝廷之法故耳。彼不以法自檢。乃估其富勢、而放利以歛怨、則人亦將不畏公法。而挾怨以逞忿。是人也、在治世、則王法之所不宥。在亂也、則大盜之所先窺。烏能長有其富乎。今能奉公守法、出其百一之蓄、以完積年之逋、使追呼之吏、足絕于門巷。馴良之稱、見旌于官府、繇是秉禮以恃其勢、循法以守其富。雖有金粟如山、莫之敢窺、終身乘堅策肥、澤流苗裔、其爲利也。

(18) 張太岳先生文集卷三十三「答山東巡撫何來山」に

清丈事、實百年曠舉、宜及僕在位、務爲一了百當。若但草草了事、可惜此時、徒爲虛文耳。

また同書同卷「答江西巡撫王又池」に

臨川丈田事、偶有聞、卽以告、今事已竣。(中略)諸公宜及僕在位、做箇一了百當、不宜草草速完也。

(19) 隆慶二年の「陳六事疏」で張居正の打ち出した政策である。詳しくは朱東潤の『張居正大傳』(前掲)第五章以下を参照。

(20) 和田清「明代の蒙古と滿洲」(『東亞史論叢』生活社 一九四二)

(21) 明實錄嘉靖四十四年十一月癸卯に

戶部尚書高耀言、國家歲入財賦有限、而京邊支費無窮。卽如四十二年發邊主客軍餉、及在內供億之費、共三百六十三萬、而各項正賦及節年逋欠所入、顯止二百四十七萬餘兩。出浮于入、凡一百一十六萬、所賴會議、各項銀六十五萬、事例銀五十一萬、僅能支給。

また明史卷七十七食貨志には

〔嘉靖〕二十九年、俺答犯京師、增兵設戍。餉額過倍。三十年、京邊歲用、至五百九十五萬。加派於是始。嗣後京邊歲用、多者過五百萬、少者亦三百餘萬、歲入不能充歲出之半。

(22) 張太岳先生文集卷三十六「陳六事疏」(明實錄隆慶二年八月丙午)

(23) 明實錄隆慶四年三月戊子

(24) 張太岳先生文集卷四十三「看詳戶部進呈揭帖疏」(明實錄萬曆七年三月戊辰)に

伏蒙發下票擬章奏內、有戶部進呈御覽揭帖一本。臣等看得、國

家財賦、正供之數、總計一歲輸之太倉銀庫者、不過四百三十餘萬兩。而細至吏承納僧道度牒等項、毫釐絲忽、皆在其中矣。嘉隆之間、海內虛耗、公私貯蓄、殊可寒心。自皇上臨御以來、躬行儉德、嚴實考成、有司催徵以時、逋負者少。姦貪犯職之人、嚴併不貸、加以北虜款貢、邊費省減、又適有天幸、歲比豐登、故得倉庫貯積、稍有贏餘。然閭閻之間、已不勝其誅求之擾矣。臣等方欲俟國用少裕、請皇上特下蠲租之詔、以慰安元元之心。今查、萬曆五年歲入四百三十五萬九千四百餘兩、而六年所入僅三百五十五萬九千八百餘兩。是比舊少進八十餘萬兩矣。五年歲出、三百四十九萬四千二百餘兩、而六年所出、乃至三百八十八萬八千四百餘兩。是比舊多用四十萬餘兩。問之該部、云因各處奏留蠲免數多、及節年追贓入犯、財產已盡、無可完納、故入數頗少。又兩次奉旨取用、及湊補金花拖欠銀兩、計三十餘萬。皆額外之需、故出數反多也。夫古者王制、以歲終制國用、量入以爲出。計三年所入、必積有一年之餘。而後可以待非常之事、無匱乏之虞。乃今一歲所出反多于所入。如此年復一年、舊積者日漸消磨、新收者日漸短少。目前支持、已覺費力、脫一旦有四方水旱之災、疆場意外之變、何以給之。此皆事之不可知、而勢之所必至者也。比時欲取之于官、則倉廩所在皆虛。無可措取。欲取之于民、則百姓膏血已竭、難以復支。而民窮勢蹙、計乃無聊。天下之患、有不可勝諱者。此臣等所深憂也。夫天地生財、止有此數、設法巧取、不能增多。惟加意樽節、則其用自足。伏望、皇上將該部所進揭帖、置之座隅、時賜省覽。總計內外用度、一切無益之費、可省者省之、無功之賞、可罷者罷之、務使歲入之數、當多于所出、以漸復祖宗之舊、庶國用可裕、而民力

亦類以少寬也。伏惟、聖明留意。
尙また同様の趣旨の張居正の上奏が、明實錄萬曆七年二月乙酉にも見えている。

(25) 明實錄萬曆四年二月庚寅に

原任戸部尙書王國光、進萬曆會計錄。上嘉之。仍命戸部再訂繕寫進覽。

(26) 明實錄萬曆九年四月乙卯

(27) 明實錄萬曆十年二月丙午

(28) 萬曆初年の財政整理を概説的網羅的に扱ったものに、朱東潤『張居正大傳』(前掲)第十章がある。

(29) 明實錄隆慶六年六月甲子に

以明年爲萬曆元年、與民更始、所有合行事宜、開列于後。(中略)一、各處審編差役、原有正數。節年有司指稱別項名色、紛紛加派、及一應無名供應之類、科需既繁、賦稅無出、閭閻蕭索、實爲隱憂。詔書到日、各有司官、卽照舊額、速行改正。此外不得擅科一錢、擅增一役。撫按官務要嚴查參治、坐贓罷黜。

(30) 明實錄萬曆四年八月辛未

(31) 張太岳兵生文集卷四十「請擇有司蠲逋賦以安民生疏」

(32) 明實錄萬曆七年八月辛巳に

戸部題覆給事中郝維喬等疏。(中略)邇來條陳新立規額、未定法令、朝三暮四、徵派陽減陰增、無名供應之費、不時科斂之需、百姓茹苦萬狀、一遇災傷、恐變生不測。卽陳乞蠲免、而各項冗費冗役、分外折乾、及門攤納辦、支應常例等銀、有司仍一概追徵、不少減免。此科臣所謂兩稅輸官者少、雜派輸官者多也。請命下咨、行各省直撫按官、行府州縣。每年春秋、稅額照

常徵外、將均徭・里甲・及各衙門公費公差、一應錢糧、但係小民出辦者、通行查議、某項應減・某項應革・某項仍舊、分類開造呈報。酌議務求省約、可行可久。而又在撫按力行查訪各有司、有清約樽節、實心爲民者、亟行獎勵。否卽參究。從之。

(33) 明實錄萬曆八年閏四月己亥に

戸部以各省直積穀備荒多不及數、撫按官間有不行題參、亦無報冊者。議定爲交代盤驗之規・著積畫一之法、責成撫按官查報。(中略)一遇災荒、乃請別項錢糧賑濟、撫按有司相率欺罔、豈朝廷設官爲民之意。今姑依議通行查核、有仍前弊、部科務從實參處。

(34) 江西に就いては明實錄萬曆八年閏四月己亥、浙江に就いては同

八年六月癸卯、直隸に就いては同九年三月辛巳、福建に就いては同九年十月丙申。

(35) 徭役の項目中には國初以來、皂隸・齋夫・膳夫のように地方官の私用に供されるものが多かった(山根幸夫「明代徭役制度の展開」東京女子大學學會、一九六六、六十八頁以下)。従って銀流通の普通化と商品生産の發展に伴い、官側の銀希求によって徭役の銀納化が開始された(岩見宏「銀差の成立をめぐる」史林四十卷五號)。その後臨時の徭役が設けられてはそれが恒常化し、一

方徭役改革を行うと稱しては役銀收入が増額されようとした。それが今ここで問題になっている。そして徭役項目の一部のものは、例えば公費銀のように、地方官の副收入として清朝時代にも受け繼がれた(岩見宏「雍正時代の公費に關する一考察」東洋史研究第十五卷第四號)。

(36) 明實錄隆慶六年七月辛亥に

詔曰。(中略)一、丈地均糧、本爲良法。

- (37) 拙稿「明後期の丈量に就いて」(史林第五十四卷第五號)参照
(38) 明實錄隆慶六年六月甲子に

以明年爲萬曆元年、與民更始、所有合行事宜、開列于後。(中略)一、各處沿河・沿江・沿海洲蕩漲出田地、(中略)或係無主新漲而爲豪強擅利者、盡數查出、計畝酌量墾科、卽充補拋荒所遺正糧。有司先將撥給過地糧數目冊報。戶部查考。

尙、川の沿岸を定期的に丈量すべきことは嘉靖十六年以後蘇州府から普及した賦役冊に既に明記されていた(萬曆常州府志卷四錢穀、額賦によれば「據經賦冊、開靖江縣治濱江(中略)舊例每五年清丈一次。(中略)仍俟應丈之年、方許收冊」のであるが、これが文字通り實行されたとは考え難い。

- (39) 明實錄萬曆三年十二月丙子に

戶科都給事中光懋言。蘆課銀兩、南直隸浙江一帶・及湖廣・江西九江等處、在有之。近歲江湖洪漲、固多坍沒田畝、地去糧存、致累包賠者、亦有新漲田地、却被豪猾勢占者。乞行蘆課地方掌印官、著實備查、(中略)量行起科、以裨國課。工部覆。允。

- (40) 明實錄萬曆六年六月辛巳
(41) 明實錄萬曆七年三月壬子
(42) 明實錄隆慶六年六月甲子に

以明年爲萬曆元年、與民更始、所有合行事宜、開列于後。(中略)一、陝西沿邊・及兩廣等處軍民田地、先年被賊蹂躪拋荒者、及各處荒閑官民田地、各該巡按御史・按察司官、勘實具奏。(中略)仍聽本處軍民、不拘土著流來諸人、但有情愿承

佃、有司驗畝給撥。三年之後、方許量行起科。就于本處倉廩送納。先將給撥過人畝姓名數目冊報。戶部查考。

- (43) 明實錄萬曆三年四月己丑
(44) 明實錄萬曆五年正月乙酉に

巡撫直隸監察御史邵陞言。鳳淮土廣人稀、加以水災民半逃亡、二千里皆成灌莽、當急爲勞來安定之計。(中略)一、給牛種。一夫授田五十畝、兩家給一健牛、一家給一牦牛。若得有生息、責令報官、以給後之招來者。種子每田一畝、粟給一斗、麥半之。

- (45) 明實錄萬曆六年七月丙子に

詔鳳陽巡撫御史及咨都察院、轉行巡按南直御史、備行營田倉事。令民年十五以上、無產無田者、俟戶從實開報、到官、每名給牛一隻・及附近荒田五十畝、責以開墾、仍給印信執照爲業。其田糧差役、俱照三年以後認納。從御史崔廷試之議也。

- (46) 明實錄萬曆六年九月庚午に

巡撫應天都察院右副都御史胡執禮奏。蘇州府屬崑山嘉定二縣荒田、欲令督率有司、趁時開墾、以補荒糧。(中略)上允行之。この點、重田德氏が州縣の治農官が嘉靖年間に廢止されたことにより國家の勸農機能が衰退したとし、それは鄉紳支配の成立と表裏の關係にあるものと斷定する(「鄉紳支配の成立と構造」岩波講座『世界歴史12』一九七二)のには疑問が残る。

- (48) 明實錄萬曆八年八月戊戌朔に

戶部以各省直開報招撫開墾文冊、多係虛數、議咨行各該撫按、(中略)逐一從公查勘。

- (49) 清水泰次「明代軍屯の崩壞」(史觀五、一九三三)、『明代土地

制度史研究』に再録)。王毓銓『明代的軍屯』(前掲)二九三頁以下に屯田侵占に關する詳細な附表がある。

60 明實錄萬曆元年四月乙卯

61 明實錄萬曆三年十二月庚午に

戶科都給事中光懋等上疏言。國初額設屯田、所在無幾。今欲復屯田。(中略)專設屯田僉事及府州僚佐、責其治丘陬畝、一一丈量、視舊額有無、分別肥瘠、俟有定効、管屯官員、舉薦超遷。部覆如議。從之。

62 明實錄萬曆四年三月己亥、同四年三月癸丑。

また同年三月辛卯に

戶部覆總督漕運吳桂芳條上屯田六議。(中略)一、倣國初法、以府州判縣簿、爲治農官、專治農事。其未設農官者、以管糧官兼之。(中略)一、召集流寓、給田開墾。無力者、官給牛種、次年還官。三稔納糧、十稔納役。原主歸認、不許告爭、另給佃種。(中略)命如議行。

63 戎笙『歪曲了歷史真實的海瑞罷官』(光明日報、一九六五年十二月二十二日)

64 清水泰次『明代莊田考』(東洋學報十六卷三號、一九二七、

『明代土地制度史研究』に再録)

65 明實錄萬曆七年六月辛卯

66 明實錄萬曆八年九月庚辰に

戶部疏稱山東撫按何起鳴陳功所奏。鄒平縣會昌侯孫忠榮田地九頃、膠州陽武侯薛祿戶丁承種祖遺田地三十七頃、覆查、不係欽賜之數優免、又無明文可據。議各量除二頃以爲祭祀之資、其餘照依民地例納。上是之。

67 明實錄萬曆九年五月丁卯

68 清水泰次『明代莊田考』(前掲、二三三頁)に、莊田には州縣の

徵稅權が及ばず領家が自ら徵稅し、一般の稅制の圈外にあつたと述べている。

69 楊園先生全集卷三十一「見聞錄一」に

神祖初年、江陵當國、思綜核名實、以致富強。撰爲會計錄一書。疑郡邑士田有未登版籍者。詔下海內、履畝而丈尺之。

60 張太岳先生文集卷四十六「諸鑑積逋以安民生疏」(明實錄萬曆十年二月丁酉、引用は實錄を主とす)に

輔臣張居正等題。竊聞、致理之要、在於安民。安民之道、在察其疾苦。年來聖明軫念元元、加意周卹。查驛傳、減徭編、省冗員、懲貪墨。頃又特下明詔、清丈田糧、查革冒免、海內訢訐、如獲更生。然尚有一事爲民病者。帶徵錢糧是也。(中略)臣等竊謂、布德施惠、當出自朝廷。若令地方官、請而得之、則恩歸于下、怨歸於上矣。乞特諭戶部、會同兵工二部、查萬曆七年以前節年逋負、除金花銀兩、係共上用、例不議免外、其餘悉蠲。明實錄萬曆八年十一月乙亥に

戶部奉旨、令各省直清丈田糧、條爲八款以請。(一)明清丈之例。謂、額失者丈、全者免。(二)議應委之官。以各右布政使總領之。分守・兵備分領之。府州縣官、則專管本境。(三)復坐派之額。謂、田有官・民・屯數等。糧有上・中・下數則。宜逐一查勘、使不得詭混。(四)復本徵之糧。如民種屯地者、卽納屯糧。軍種民地者、卽納民糧。(五)嚴欺隱之律。有自首歷年詭占・及開墾未報者、免罪。首報不實者、連坐。豪右隱占者、發追重處。(六)定清丈之期。(七)行丈量曆算之法。(八)處紙筭・供應之費。上依其議、

令各撫・按官、悉心查覈、着實舉行。毋得苟且了事、反滋勞擾。

(62) 國初洪武十四年以來明朝の公課收奪は里甲制を通して行われた。その爲に作られた賦役黃冊は戶籍と徵稅臺帳を兼ねるものであった。また戶籍上、軍戶・民戶・鹽戶等の區別が設けられていたから、國家による稅役の收奪は人間中心に行われていたともいえるよう(韋慶遠『明代黃冊制度』、山根幸夫『明代徭役制度の展開』等參照)。

(63) 徵稅に就いては官田や民田の區別を無くして一率化する方向にあり(陳恆力『補農書研究』附件四、森正夫『十六世紀太湖周邊地帯における官田制度の改革』前掲)、また徭役に就いても評價基準を田土のみに移しつつあった。十段冊法や一條鞭法がその典型である。

(64) 古今治平略卷一、國朝田賦に

〔萬曆〕八年、又允輔臣議、行丈量法。大均天下之田。旨下。言所爲均賦者、用蘇民瘼、非盡地利、求增稅也。

(65) 萬曆常州府志卷四錢穀、卷末の唐鶴徵の言うところでは至萬曆初年、江陵奉旨、遍宇內而丈量焉。初意定期均賦、不期增額也。

(66) 崇禎義烏縣志卷八に

萬曆初我皇上、用輔臣議、行丈量法。大均天下之田。於是、知縣范僑履畝清丈。(中略)是時法嚴、令其人習步算、而賦均、民間虛糧賠累之弊、盡汰。

なお莊田の丈量に就いて大同巡撫の訴えに答えた皇帝の言葉にも、今回の丈量を指して「丈田均糧」といっている(後注側を參照)。

照)。

(67) 嘉靖期の丈地均糧が地主層のヘゲモニー下に展開されたことに就いては、拙稿「明後期の丈量に就いて」(史林第五十四卷第五號)を參照。また張居正が既に丈地均糧の行われていた江蘇地方に對しても、萬曆初年以後も繰り返し地主層の横暴を追求していることに就いては、應天巡撫宋儀望や胡執禮に與えた書翰によっても知られる(前注(60)參照)。

(68) 明實錄萬曆九年九月乙亥に

山東撫按何起鳴・陳功奏。(中略)糧悉照舊。往日荒地包賠者以餘地均減。

(69) 明實錄萬曆九年十二月己亥に

丈江西六十六州縣官民塘地、原額外丈出地(中略)免另行陞科、即將抵補該省節年小民包賠虛糧。

(70) 明實錄萬曆十年二月丁酉に

薊遼總督吳兌等題。(中略)議以多餘之地、補失額之糧。

(71) 明實錄萬曆八年十一月乙丑に

戶部奏、造黃冊。將專督理、覈田數、清戶口、嚴里書、發寄莊、別飛詭、慎推收、均里申諸項、刊刻成書。頒布天下府州縣、著爲式。

(72) 明實錄萬曆八年九月庚辰

福建清丈田糧事竣。撫臣勞堪以聞。部覆謂、宜刊定成書、併造入黃冊、使奸豪者不得更爲變亂。上可其奏。

(73) 舊管は十年前の所有地、新收は最近十年間に買ひ入れたり開墾した土地、開除は災害や賣却により自己の所有を離れた土地、實在は現在の所有地のことで、舊管に新收を加えて開除を引けば實

在地が得られる（韋慶遠『明代黃冊制度』第一章第三節）。

後湖志卷十に

萬曆八年、南京戶科等衙門管理黃冊給事中王蔚疏言。（中略）

緣是隆慶六年、工科給事中鄭岳曾題准另造清丈實徵文冊、與黃冊并解後湖。審若是、且無論實徵文冊真偽莫辨、無從稽考、即

別立實徵名色、則祖宗黃冊將愈病矣。臣等私切痛恨、以爲黃冊

國家重務、豈宜如是。（中略）蓋造冊之式、先舊管、次新收、

次開除、而以實在終焉。原非一定不可增減之制。使各該衙門、

依式據實攢造、卽以此爲賦役黃冊、則實徵之錢糧、卽此冊所謂

賦也、實徵之人丁、卽此冊所謂役也、又何不同之有哉。

萬曆常州府志卷四戶口、攢造黃冊規則に

萬曆十年、概縣（武進縣）丈量田地。（中略）又于空役中、食

點黃冊書手二名、管造鄉總。（中略）應用紙張諸費、以各年均

徭放剩餘銀、支給。

萬曆邱抄 萬曆九年夏四月に

行丈量法、大均天下田賦。湖廣巡撫陳省題查首冒濫懇辭優免以

均賦役等事。據江陵縣鄉官編修張祠修揭稱。近奉家父嚴命、查

戶內田糧實數、恐有詭寄影射等弊。因弟本縣賦役丈冊一查、內

開。內閣張優免六百四十餘石、不勝悚駭。向聞、家父相承祖

產、并自置田土、計糧不過七十餘石。此五百餘石者、何自而來

耶。及細加查覆（覈）、乃知其中積弊多端。有族人倚借名號、一

體優免者。有家僮混將私田、槩行優免者。有奸豪賄賂該吏、竄

名戶下、巧爲規避而逸者。有子弟族僕、私庇親故、公行寄受而逸

者。是以十分中、論本宅僅得其一、餘皆他人包免。今既奉父命

查出、豈容姑息。願將本宅田糧七十四石、例得優免者、盡數與

小民一體當差。（中略）懇乞天語、諭令在京大臣以及內外庶

官、將各員項下糧地、逐一著令本家清查、一遵題准事例優免、

有親族冒免、猾吏奸民影射者、許自覺察改正、并行各省直撫按

官、照例着實清查。（中略）行各縣、將境內優免仕宦舉監生員

吏承定額、并借用夫馬定例、俱各刻石縣門、使人盡見、以杜

濫免濫用之弊。下戶部看議。

明實錄萬曆十年正月戊寅に

本部據撫按會奏、題請各省遵行。今據浙江等處冊報、共革過冒

免人丁四萬三千七百八十。糧六萬三千八百八十石有奇。合移咨

各省撫按、嚴督所屬、將優免定例、刊石遵守。

尙最近的郷紳をめぐる諸研究（後注参照）で、郷紳的土地所有

を推進した一要素として郷紳層の優免特權が再評價されつつある

が、この萬曆九年の優免整理には殆んど言及されていない。

前注参照

海瑞集下冊「贈陳侯丈畝成功序」に

萬曆八年部割、天下有司徹田爲糧。（中略）計之雖久、不出三

月四月外之功。而今也三年行之、行之三年、百姓以爲三年之

害。

明實錄萬曆九年十二月乙未に

以清丈田畝怠緩、松江知府閔邦寧・池州知府郭四維・安慶知府

葉夢熊・徽州掌印同知李好問、各住俸戴罪管事。

同治安義縣志卷六職官志、名宦に

汪廷元、徽州休寧人、舉人。萬曆七年任縣令、越明年、奉文丈

量田地。單騎履勘裏糧。從事不費民間一錢。

63 前注55參照

64 張給諫集「因事陳言疏」(皇明經世文編卷四百三十八所收)に臣先任江右、承委丈量、由始事以報成、前後兩年、蓋身親其事之顛末、而目繫其中之利弊者、方敢詳言。(中略)奉明旨之後、即定以期限、急如星火。在覆丈之時、則不許長吏入城、在造冊之時、則不許長吏就榻。

張棟は萬曆五年の進士で、江西省南昌府新建縣の知縣を経て(明史卷二百三十三李獻可の附傳)、萬曆九年當時江西省建昌府瀘溪縣の知縣であつた(萬曆建昌府志卷二田賦)が、その後工科給事中に昇進した。

65 張給諫集「因事陳言疏」(前掲)に

爾時一奉明旨、即一概議。無論其經丈與未丈、無論其有弊與無弊、一體責成、一體督促。有言民情不願丈者、參罰立至。于是有民不願丈、而強之使丈者、是以謂之、不善也。(中略)奉明旨之後、即定以限期、急如星火。(中略)撫按逼司府、司府逼州縣。若曰迎略毋遲、苟且完事、毋稽延遲限。其于民情之稱便、地方之相安不相安、都付之不问矣。是以謂行之不善也。于法何與也。爾時各州縣官、固有承望風旨而罔恤民隱者矣。亦豈無卓然有見而不畏撫按者乎。願明旨在上、誰敢不欽。効疏在前、誰敢不避。語云兕虎在前、見隨侯之珠而不及撿、非不愛珠也。先避禍而後就利也、言及至此、亦可哀矣。

66 天下郡國利病書原編第十三冊河南「臨漳縣丈地記」に
有司志立功者、以神速爲能、不丈而報完。志博名者、以核繁爲能、僞增而報數。欺隱未必革、而浮糧益浮矣。

67 北村敬直「明末清初における地主について」(歴史學研究一四

〇號、一九四九)

68 海瑞が唐敬亭即ち唐可封に宛てた書翰には丈量に關する記事が多く出ている。唐可封は瓊州府知府(萬曆廣東通志卷六十、郡國志四十七、職官)を経た後、海南道按察副使に陞任している。また海瑞の書翰には「分巡道唐敬亭」と斷っているが、分巡道には按察司副使兼事がある(明史卷七十五職官志)から、これらの記事は唐可封が按察司副使に任じられた年、即ち萬曆九年に出されたものでなければならぬ。(萬曆廣東通志卷十藩省志十秩官)。従つて吳晗編『海瑞集(下)』の卷末に王國憲が作成した「海忠介公年譜」で、これら丈量に關する記事を萬曆六年の項に比定し、萬曆七年の項に「此時各縣皆行清丈」と述べているのは誤りである。尙、萬曆廣東通志卷五十九瓊州府賦役の箇所にも、萬曆六年や七年に丈量の行われた形跡は無く、萬曆十年に清丈額を掲げている。また廣東通志の他の箇所を調べても萬曆十年に清丈額が書かれていて、六年や七年に丈量が行われたとは考え難い。従つて海瑞と唐可封の間の往復書翰は、萬曆九年の全國土地丈量の際の實情を示すものといえる。

69 海瑞集下冊「復唐敬亭」(四五八頁)に

如生一人田在那社一、糧籍又寄在海口二。是那社有其田而無其糧、故謂之無糧。瓊山大約一半本里有糧有田、一半田不隨糧、百四里皆然。極爲參錯。翁今將使那社里排丈生之田耶。抑海口里排丈生之田耶。

同「又復」(四五八～五九頁)に

翁今又以糧在之里排任之。天下事不必盡同、求其無弊而已。所謂及其成功一也。所難者則生前云一里排奔走不及、何埔何段、

上中下則、茫不及知。若翁有神智、別有善處之方、則亦何難之有哉。

同様の指摘は「奉分巡道唐敬亭」(四五七頁)、「復劉大尹」(四六〇—一頁)「復」(四六二頁)等にも見えている。

09 海瑞集下冊「復」(四六三頁)に

翁謂部議聽在外便宜行事、何曾執必我依之。然部議又有國初焦麟老冊爲主之說、欲天下之人主之也。

01 川勝前論(一)(三十一頁) 參照

02 川勝前論(二)第二節第一項「丈量策に現われた税糧徵收原則」參照

03 陸隴其「靈壽志論」(皇朝經世文編卷三十一所收)に

蓋萬曆九年丈量。是時(中略)地寬者糧輕、地窄者糧重。如元氏縣、上地每三畝六分七釐四毫、折徵糧地一畝。至下地則每十一畝、折徵糧地一畝。

04 廣畝狹畝に言及した研究には、藤井宏「明代田土統計に關する一考察」(前掲第三章の注05)と、谷光隆「明代馬政の一考察」(奈良女子大學文學部研究年報第十三號、二十一頁)とがある。

05 川勝前論(一)(二十六頁)

06 海瑞集下冊「又復」(四五九頁)に

二熟田爲一等、一熟田爲二等、亦乞更爲酌定。蓋同是一熟田、收成相去遠甚。一熟田亦倍收於二熟者。

07 前注06參照

08 葡遼(五五二・四六頃)、陝西(一九・五三八・六六頃)、陝西

三邊(一八、九九〇頃)、寧夏(四、〇三二頃)。尙これらは邊境地帶の清丈報告ばかりであるが、地方志等によれば、萬曆九年又は十年の清丈額數に荒地數を伴っているものが見受けられるか

ら、内地でも荒地が量られた。

09 明實錄萬曆十年五月癸未に

紹丈量民田事例、委官丈勘、以清場田。引程以五月爲限。(中略)奉旨、如議。

00 明實錄萬曆九年五月庚午に

巡撫大同賈應元・巡按茹宗舜疏。劾饒陽王府鎮國中尉廷煥・潞城王府奉國將軍俊柳・鎮國中尉充賁。先是、以阻撓丈地、奉旨戒飭。已而充賁病故。俊柳等稱赴闕陳情、擅出鎮城。頃插黃旗、書關指者斬。潞城王充煜坐視、羣宗出城、若罔聞知。太平王肅鉉不行參奏。長史王明輔、署教授胡官輔、導失職、乞分別處治。戶科給事中郝維喬等、亦具疏參糾。因言。該省委官、宜遵奉明旨、將應查地土、依法查覈。及稱宗室置糧軍民地土、不特代府爲然。乞通行天下王府、各嚴諭宗室、凡置買田土、俱聽撫按官查勘明白、照例納糧。止許佃戶耕種、不許私出城郭。禮部覆議、上請。上以各宗擅出封城、猖狂無禮、俊柳革爲庶人。充鯤・充森・充鱣、各革祿米。充煜罰祿米半年。仍敕各該撫按、丈田均糧。但有抗違阻撓、不分宗室・官宦・軍・民、據法奏來重處。

001 明實錄萬曆九年九月戊寅

002 陸世儀「思辨錄輯要」卷十六、治平類に

萬曆時江陵相公當國、丈量田地。吳中詩云。量盡山田與水田、只留(餘)滄海與青天。如今那有閩洲渚(世間安得閩洲渚)、寄語沙鷗莫浪眠。

尙、馮桂芬の顯志堂稿卷五「致姚衡堂書」にも同じ詩が掲げられているので、文字の異なるものは顯志堂稿のものを「」で示した。